

身体 / 非 身体

1. 「わたしたちがわたしたちの感覚を通して受け取っているのは、わたしたちの考えも及ばなければ想像も出来ない《世界》の多様性やありうべきさまざまな変奏のうちのごくわずかな部分を、わたしたちの感受性用に移調してくれる最小限の指示だけである、ということをおわたしは観察する。」 ポール・ヴァレリー『身体に関する素朴な考察』より
2. 我々は身体から逃れられない。環境を感じ取る基点は身体にあり、仮想空間と実空間の接点も身体にある。ヴァーチャルは現実の一部である。
3. これまでの都市建築デザインは、「ハコ」・「モノ」 (= object) の配置が、人間関係やアクティビティ、社会システムなど「ナカミ」・「コト」 (= contents) の配置であると考えられてきた。「ハコ」と「ナカミ」の呪縛 . . . 生身の身体を伴わない抽象空間、仮想空間も認識の上では存在するが、都市建築デザインにおいては実空間を扱うものである以上、物理的な距離の問題 (= 「ハコ」の問題) から逃れることは不可能である。
4. しかし、中心に据えられるべきは「ナカミ」の問題で、物質のリアリティを超えた、生身の人間のリアリティ (生物学的・心理学的・社会的 . . .) を追及しなければならない。
5. 1960 年代の都市建築デザインのトレンドは、丹下健三の「東京計画」や菊竹清訓の「海上都市」など、未来都市志向 (大阪万博的)、巨大インフラ志向であり、全体から部分へという近代主義的単一システムの上にある集合体としての社会像、都市像が描かれていた。現在のネットやケータイといった新しいインフラは、個人単位のコミュニケーションを促進、グローバル化させ、個々の振る舞いがネットワーク全体を変容させる契機となりうる。都市や社会をデザインするにあたり、これまでとは逆に小さいものから全体を考えることも可能なのではないか。
6. 会社や学校、家族など、ある集合体 (小さい社会) が活動・生活する空間は固定的限定的で、個々の空間どうしは連続性が保持されていなければならなかったが、IT コミュニケーション環境の発達により、その原則は揺らぎ始めている。
7. 現に都市に離散して生活している家族、都市を移動しながら働くビジネスマンなどは存在する。逆に、同じ時間と空間を共有していてもバラバラのネットワークに意識が接続されていれば、実際は離散状態にあると言える。
8. 建築はそもそも空間をいかに連結 / 分離させるかの作法である。最も連結 / 分離の初源的デバイスは「ドア」であり、時間・距離を超越し実空間を連結 / 分離することのできる「どこでもドア」は究極のデバイスである。われわれは身体 / 非 身体の間から、「連結可能性と分離可能性」 (原広司) をデザインしなければならない。

ON / OFF

9. 私の周りの学生達の多くが自分のブログを立ち上げ、そこで自分の信条や嗜好、主張などを吐露してい

る。しかし、グローバルに開かれているはずのブログは毎日会っているであろう親しい友人にしかその存在は知らされず、自分が居心地の良い狭いコミュニティでの、選択性（ただ、学生の中にもブログ上で多様な話題、視点を提供し、複数のコミュニティを連鎖させていく役割をなすものもある。）onlineのグローバルなコミュニティを志向するというより、offlineのローカルなコミュニティを補完するものとしての役割が強い。そして、あわよくばどこかのだれかに発見して欲しいという希望がその背後にある。

10. 高品質テレビ会議システムを用いて他大学と建築設計作品のプレゼンテーションをした際のことである。学生たちは討議を続けるうちに、お互いが話している内容よりも、相手がどのような状況の中で、どのような表情で語り、聞いているのかを気にするようになり、相手の出方によっては、語り口を変えるようになっていった。後ろで聞いている聴衆の表情のような、意図せず映ってしまったものがコミュニケーションに大きく影響を及ぼすこともある。コンテンツよりコンテキストが大事なコミュニケーション。
11. 文脈が重視される会話（ダイアログ）が苦手なために、モノログとして言葉がやりとりできるメールは居心地のよいメディアである。ケータイでの通話と違い、相手の都合に配慮したり、さほど親密でない相手とは居心地の悪い沈黙が生じる心配もない。つまり相手のことを理解し慮るコミュニケーションがめんどくさいので会話のキャッチボールでなくデッドボール（もしくは相手にかすりもしない）しかできないディスコミュニケーションが広がりつつある。
12. ケータイやネットは会社や学校、その他外部の社会が家庭に入り込むことを促進している。お父さんは帰ってもパソコンの前、娘はTVの前でケータイメール。お父さんは外で働いてお母さんは家庭を守るという近代家族像が経済成長を支えてきたといえるが、就業形態の多様化や男女共同参画が進むことに加え、情報環境が充実することにより、家の中でもON/OFFの境がなくなることで結果的に仕事の時間の割合が増え、家族の時間が削られていく傾向にあるのではないか。

the haves / the have-nots

13. 情報や経済、教育など多様な面で格差が広がる社会。ある尺度に基づいた格差・階級を見つけるのではなく多様性を認めることが大切ではあるのだが、一部の「持てる者」と「持たざる者」という意識がどこかに存在する以上、両者の相克・衝突が生じ、犯罪が発生する。セキュリティの重要性。
14. 多くの人が高価で高解像度なコミュニケーションなど必要としていないのではないか？（特にモノログ的コミュニケーションが居心地が良い人たち）マクルーハンが言うところの“クール”なメディアを安価に気軽につかえれば十分ではないか？現在の40歳が65歳になる頃には、ほとんどのひとが親指での文字入力インターフェースに慣れている（親指ネイティブ？）はずであり、別のインターフェースに移行するにしても十分教育されている。ビジュアル、文字、オーラルコミュニケーションの解像度とバランスがキモとなる。
15. しかし、テレビやTVゲームの浸透と同じように、低所得者層が安価な娯楽としてインターネットやケータイを使用することになり、そこでは高品質高解像度のコンテンツが要求される。家庭の中では、家電や住宅のコンピュータ化、パソコンの家電化によりパソコンの優位性が変化、そのような技術の恩恵を必要としない人、あるいは必要だが享受できない人と、十分使いこなせる環境の人との差が生じる。
16. “いつでも、どこでも、だれにでも”の安価なサービスより、“いまだけ、ここだけ、あなただけ”のスペシャルサービスを受けられる人との格差。

fast / slow

17. 建築の手法なんて基本的には何千年も変わらない。パリ万博の時代、鉄とガラスとコンクリートの建築技術の革命と社会構造の変化が、合理主義や機能主義といった建築的革命をもたらした。情報革命（懐かしいフレーズ）の時代に、都市空間や建築空間に情報環境を織り込むことにより社会全体の利益となるような環境革命が起こせるのか。
18. その際に生じる問題として、建築躯体の寿命と情報装置類の更新速度が違ふことが挙げられる。建築躯体としては100年持つものであっても、社会ニーズの変化に対応するために、そこに織り込まれた情報デバイス類は更新されなければならない。建築躯体の作り方も更新に耐えうるものである必要がある。これは情報デバイスの寿命というより技術革新あるいは消費社会のスピードによるところが大きく、そのような面での持続可能性が議論される必要がある。

Uni / Trans

19 - 24

日本建築学会情報社会デザイン小委員会（主査：本江正茂）では、標準化されたプロトコルを持つ統一的なネットワークを“Uni”指向と呼び、それに対して、“トランスネットワークシティ”という概念を提示している。

Uni	Trans
同一プロトコルのネットワークを拡大しようとする。	異なるプロトコルのネットワークを接続しようとする。
ネットワーク内部において、十分に自由であるような標準化の理想をめざす。	各ネットワーク内部の標準化は歓迎するが、他との統一標準化は無理だと考える。
ロボティクス・ネットワークにおいては、ロボットと環境とははじめから同一のプロトコルでつながっている。	ヒトが生物である以上、オートポイエティックな閉鎖系であることを受け入れて、そこからできることをやる。
すべてが融けあう単一のネットワークを理想とし、ライブニッツ的な「普遍言語」を夢見る。	各ネットワークのプロトコルがバラバラに異なっているという現実を受け入れ、「普遍」の夢は見ない。
無駄の多いコミュニケーションを効率化し、シームレスな相互理解を目指す。	片言のコミュニケーションを信じ、ギリギリの合意をめざす。
エンジニア的な問題構成。	デザイナー的な問題構成。

仲隆介、本江正茂『情報社会デザイン小委員会の活動とコピキタス社会へのスタンス』より

25. 「交通網やエネルギー供給網、上下水道網、通信網やロジスティックサービス網など、20世紀的な太く

て粗い社会インフラとしてのネットワークを、もっと精密精緻に結び合わせ、世界の連続性を確保すること」(仲・本江)。そのためにモバイルネットワークは有効なドライブとなる。

参考文献

- ポール・ヴァレリー『身体に関する素朴な考察』 「ヴァレリー・セレクション 下」東宏治、松田浩則編役 平凡社ライブラリー
- 対談：永田清人×隈研吾「新しい“ケータイ都市”の創造をめざして」新建築 2005年6月号
- 原広司『インターネットのような建築』2004年度日本建築学会大会情報システム技術部門研究協議会資料「ユビキタス社会における建築と情報の新しいかたち」2004年8月、pp7-10
- 仲隆介、本江正茂『情報社会デザイン小委員会の活動とユビキタス社会へのスタンス』2004年度日本建築学会大会情報システム技術部門研究協議会資料「ユビキタス社会における建築と情報の新しいかたち」2004年8月、pp54 - 55